雲

フォト劇場（18）

写真が生むものがたり

鉄塔と高圧線でずたずたに斬られし雲は北へと奔る

喜多　功

雲、雲、雲となんども言ってみる。雲は日蔭をつくる。野良で働く百姓には、三十五度を超えるあつさをやわらげてくれる。ありがたい存在だ。時には雨を降らしてくれる貴重な野の神さまだ。

サッカーの子ら帰るまでふくふくと積乱雲はひたすら泳ふ

黒岡美江子

動かないようだが、雲は刻々と形を変える。斜めに伸びる雲が膨らむと下側が鱗のように見えてまるで龍のようだ。松谷みよ子の『龍の子太郎』の童話を思いながらしばらく雲と遊んだ夏の日を思い出す。

写真・木畑紀子

ガラス戸のとほくをながれゆく雲は空の旅人われも旅人

柏崎　睦

私は父の転勤先の北海道で芽生え、松阪市で生れた。父の死により、尾鷲へ移転して育った。母の死後、兄の住む敦賀へ、そして東京へと少しづつ寄進をし、結婚して岩手の住民となった。この先の旅の続きはわからない。

仰向けの蟬よ見えるか複眼に夏の終はりの入道雲が

松下菜水

僕の目は背中側についているから今、見えるのは地面だけさ。もう一度、雲が見たいな。でも、一週間前、僕がオシッコをかけたときの君の顔ったら傑作だった。ありがと…じゃ、逝くね。僕はこのひと夏を懸命に生きたよ。